

# 賀川豊彦とその時代

——友無き者の友となりて——

嶋田啓一郎

## I 血潮のたぎる宗教的社会運動家

「>時<の歩みは三重である。未来はためらいつつ近づき、現在はずの矢のように早く飛び去り、過去は永久に静かに立っている。」(シラー)

賀川豊彦(1888~1960年、明治21~昭和35年)が、その時代の疾風怒濤に身を挺して、獅子奮迅の朝夕を送った72年間の生涯は、日清・日露・第一次・第二次世界大戦の四回の戦争体験を貫いて、日本資本主義社会の急激に進展するさなかで、日本人が近代化過程を急ぐ歴史的大転換の時期でもあった。その寿命は、日本の男子平均寿命に当たり、短命というべきではないが、その波瀾に富む苦闘の春秋は、まさに飛びゆく矢のごとくにあわただしいものであった。彼みずから、「一生を五十年として、その半分を寝ることと食うことに費してしまうとすれば、一生の間に創造的態度に当られる期間は、僅か5年か6年しかない」と嘆いているが、文字通り寝食を忘れて東奔西走するその生涯も、いまにして顧みれば、まさに一瞬にして飛び去った「過去」の一つの絵巻物のように、永久に静かに私ども後輩の胸に語りかけてくる想いがするのである。

「浮世夢の如し」と云い、「奢れる者も久しからず、春の夜の夢の如し。猛き心も終には亡びぬ。風の前の塵におなじ」ともいう。しかし賀川豊彦を知るかぎりの人は、たとえ人生が、二つの永遠の間の僅かな閃きに過ぎぬにせよ、単なる空夢ではなく、地上の瞬間のなかに永遠の光を宿す尊さを秘めていることを、率直に認めざるを得ないであろう。賀川と格別の親交を篤くした阪本勝氏(元兵庫県知事)は、追憶集『神はわが牧者—賀川豊彦の生涯と其の事業』のなかに、「日本に生れ育った偉大な人物のなかで、賀川先生はおそらく、眼識高く、愛情深く、こんなお方がまたと現われるものではない。国境、人種を超えた毅然たる存在だ。ああ、あの新川のスラム街、あそこで命がけで伝道せられた先生の情熱と意気よ。とても普通の人に出ることではない。私は日本人の中で誰を一番尊敬するか、と問われれば、“賀川豊彦”と

言下に答える。それ程ずば抜けた存在である。」と記されている。

賀川は、如何なる意味で「偉大な人物」であったのであろうか。私は嘗て、拙著『福音と社会』(1971年)のなかで、賀川豊彦論を展開するに当って、「人々がその師について語るところは、その語り手の性格の反映であり、不満の償いである。不当に理想化され偶像化された神話的表现は、そらぞらしい虚無に通ずるし、あまのじゃくな風刺は、あと味の悪い卑屈さを感じさせるばかりである。そのような主観の歪曲では、賀川先生の真の面目は語るべくもない。」と記したが、私自身の少年時代より、賀川晩年にいたる永い師事生活を通して、その息吹きに直接触れた親近感、敬慕、愛着の情を離れて、客観的に凝視する賀川豊彦その人は、必ずしも世の人の思うがごとくに、ひたすらに賢人・聖者の域を歩む人物ではなかった。彼は、まさに多情多感、人間的欲望の持主として、人知れぬ内面的苦悩と闘う独特の陰翳を漂わせる性格を背負っていた。人間的執着に魂のうずきをおぼえながら、聖書に手をおいて、独り密室に熱烈な祈禱を捧げるこの現し身の人を垣間見た私は、宗教信仰が現実の人間にいかにか大きな奇蹟をもたらすかを、否定し得なくなったのである。彼は聖書に云う「肉の念い」に苦悶する人間生活の哀歎をその極みまで知り抜いて、人民の生活のなかに共に悦び共に苦しむ「街の思想家」としての生涯を貫き終えたのであった。それ故に、私は前記の賀川豊彦論に、次のように書き加えたのである。「振幅の大きな人物は、それだけにまた世の毀誉褒貶も辛らつである。先生を売名家あるいは偽善者であると非難する声もまれではなかった。しかしバラの花が鋭い刺をもつと云って責めてはならぬ。あのいたいたい刺をもつバラが、かくも麗しい花を咲かせる奇蹟をこそ賛美しなければならぬ。そこにこそ賀川先生の真の偉大さがあるのではなかったか。」

宗教問題を論ずることは、もちろん本稿の目的とするところではない。しかしキリスト教信仰に身命を帰依したその一事を秘めては、賀川の真生命を語ることは不可

能である。社会党指導者としての河上文太郎氏は、先に述べた追憶集のなかで、こう記されている。「第一次大戦後、澎湃として起った社会運動の先頭に、賀川先生の目ざましい活躍が見られるようになった。賀川先生は、我が国の社会運動のあらゆる分野の開拓者であった。労働運動、農民運動、無産政党運動、協同組合など、みな賀川先生が創立者的影響を与えて発展してきたものである。だが賀川先生の偉いところは、そうした社会運動の仕事を各方面で開拓しながら、最後まで伝道者の立場を捨てなかったことである。この点がほかの人と違っている。外国で賀川先生が高く評価され、世界の何大聖人かの一人に数えられるのも、社会運動の開拓者として足跡を残しながら、最後までキリスト教伝道者として一貫されたことによるものだとは私は信じている。」

## II 宇宙の目的を追求する戦闘的態度

冒頭に述べたように、シラーは「時々の歩みについて、未来はためらいつつ近づき」と記している。歴史は、人間のさまざまな肉の念のゆえに、直線的に予言することを許さず、人間は法則と価値判断の然り糸を、愛欲のまにまに無方向に歪めようとする。洞察を誤る人生行路では、未来はつねにただためらいつつ歩み寄り、世間の人々は、明日の進路に戸惑いする。そのとき、もし賀川に「偉大」と呼べるものがあるとすれば、いまだ社会発展についての社会科学的法則の探求において、「街の科学者」としての素人流の未熟さを免れ得なかったとしても、宗教人としての人間本性と其の創造性への洞察と、その人間探求心への無限の執念に導かれる社会問題分析の努力によって、Geoffrey Vickers 卿の著書“*Undirected Society*” (1959 年) にいう無方向で混沌としたものにみえる現代社会のなかで、聖書にいう「羊のよそおいして来れども、内は奪い掠むる狼」のようなにせ言者たちと戦って、社会体制の内側に必然的に発生する人間疎外からの人間解放の道を指し示した開拓者的役割を、その「偉大さ」の筆頭に挙げなければならないと思う。その労働組合運動、協同組合運動、社会福祉活動、また政党運動のごとき、凡ての社会活動は、一貫して賀川の聖書的人格主義にその源流を発するものであった。

ヘーゲルは、『世界史の哲学』のなかで、「各個人はその国民と時代の子である。なにびともその後にとどまらず、またいわんやその前に進むことができない。」と述べている。

在世中の賀川と同じように、日本社会党の顧問を勤められる三宅正一氏の賀川論を描く『激動期の日本社会運

動史』(1973 年) が物語っているように、「明治・大正・昭和の三代にわたって、まさに激しく生き抜いた人、賀川豊彦の生涯は、一面では疑いもなく時代と社会を映すカガミでもあった。」(25 頁) 確かに賀川は、その置かれた時代の子であり、その足跡には、いと鮮かにその社会状況が反映している。にも拘らず、そこには社会の進展を先取りする歴史の洞察力ともいふべきものがあった。その歴史の先見性を支えたものは、賀川思想の精髓を結晶せしめた晩年の大作『宇宙の目的』(1958 年、70 歳) に示されているように、自然と人間社会とを統一する宇宙の大法則の発見であった。自然の世界に整然たる法則的秩序が実在するように、人間の歴史世界にも「愛の物理学」とも呼ぶべき客観的法則が、厳然として支配し、自然と人間世界とが摂理、すなわち神意思の支配領域のもとに統轄せられて、荘嚴な目的統一を形成すると考えられている。そこには、宗教と科学の独特の融合による法則的世界観があり、それを基礎として、歴史的現実の批判と将来への展望が引き出されてくるのである。

私は、賀川豊彦の神学思想や社会科学的理解に、必ずしも全面的心服を快しとするものではない。面会のたびに、その不肖の弟子は、師の理論体系に疑問を呈し、つねに一定の間隔をおいて、学界の動向を判断の背景におきながら、是非を吟味する余裕をもつことを心掛けてきた。厳格な是々非々主義の検討を経ずしては、弟子は真にその師の教えを発展的に継承するものとはならないからである。

私は、同志社に学んだのを機縁として、安部磯雄、山室軍平の二大先輩に直接教を乞う機会を与えられ、秘かに生涯の敬慕を捧げる身となったのであるが、清澄・端正、おのずから大安心に導く想いあるこれら両先輩に較べて、賀川は激しい挑戦的人物であり、次々に投げかけてくる課題によって心魂を揺さぶられ、「然り」と「否」との交錯する問答に翻弄されながら、いかにしても離れ難い魅力をもつ人柄であった。その魅力こそは、聖書によって、ひとたび正義と愛の奥義に心とらえられたひとりの人間が、その病身、その苦難を凌いで、かくも戦闘的な生涯を歴史に遺しうるといふ活きた事実であった。賀川を非難する論客は多い。しかし神と人道のために、これほどすさまじい努力の生涯を終った人物には、私はもう二度と逢うことはできないように思う。

賀川を論ずる内外多くの文献のなかで、隅谷三喜男教授の『賀川豊彦』(1965 年) は、いまでも類いのない公平・均衡を保つ好著である。既述の三宅正一氏の『激動期の社会運動史』第 1 部「賀川豊彦論—あるキリスト教

社会主義者の生涯と実践」は、同氏の表現をもってすれば、「とかく『単線的』になりがちだった当時の運動指導者のなかにあって、もっとも『多元的』な運動をリードしたキリスト教社会主義者・賀川豊彦」を、政界の先輩戦友として、歴史的に位置付ける視角において、独自の含蓄をもつ感動の書である。しかし賀川と一身同体の理解者として、彼を良きも悪きも共に呑み込む誠実・忠実な人物・前明治学院院長武藤富男氏が、キリスト新聞社長として、24巻の膨大な『賀川豊彦全集』出版の大業に併せて、『賀川豊彦全集ダイジェスト』（1966年）に丹念・刻明に広汎な論述の内容を解説されていることは、賀川研究に灯台守の役目を果たしていることを、特筆しておかなければならぬ。

伝記としては、いくつかあるなかで、やはり横山春一著『賀川豊彦伝』（1950年）は、記録の精細さを誇り得るものであろう。私は、1952年、横山兄とともにロスアンゼルスで賀川を記念する「カガワ・ストリート」を歩みつつ、賀川を論じ合ったことがあるが、そのころの横山氏は、純情・熱意の賀川信奉青年であった。

海外文献としては、W. Axling, C. M. Simon, E. O. Bradshaw 等の賀川論がめばしいものであるが、特に Mrs. J. Fretcher の1958年出版の賀川伝は、翌年1月西独からシュバイツァー賞を贈られている。

〔註〕賀川豊彦を敬慕しそのイエス団に加盟して、いまま同志活動に参加する人々のなかに、隠れた研究者たちが多い。終戦直後、賀川の協同組合運動を助けるべく江東消費組合、日本協同組合同盟に身を投じた同志社大学卒業生、渡辺達也君は、賀川著述の単行本百余冊のうち、その主なもの実に77冊を蒐集して、賀川研究のため、その全部を私に寄贈されたのであるが、賀川傘下には、そのような熱心党が少くないことは、賀川が特別な魅力の人であったことを物語っている。

### III 極貧の実存的体験者として

賀川在位の明治・大正・昭和期は、後進資本主義国日本が、原始的資本蓄積の強行過程で、国家権力の強圧と、これを超えて、日本近代化を推進しようとする民主主義の波とが、交互に訪れた二回の周期に跨っているといえることができる。

この二つの歴史的時期のうちで、賀川が最も活発にその個性を発揮したのは、第一週期の後半、すなわち大正リベリズムが明治期以来の天皇制ヒエラルキーの武断的権威主義に対抗して、護憲運動により憲政常道を確立し、民主的議会主義の援護のもとに、労働組合、農民組合等の新社会秩序をもって、資本の運動法則に抑圧される国民大衆の社会的勢力を防衛しようとする「人間解

放」昂揚の時期と、第二週期、すなわち大正リベリズムと太平洋戦争による大敗北との暗黒の谷間を走りくぐる軍部ファシズムとの対抗の時代と、大戦終結による新日本の民主化状況に対応する宗教的精神革命の強調、並びに協同組合運動による新経済秩序確立により、恒久平和の社会体制を実現しようとした時期である。

明治以降の日本社会の特質は、徳川時代の永い鎖国時代を通して、先進諸国に決定的な遅れをとったこの国が、急速に資本蓄積を強行して、富国強兵策を計ることを急務とした。第二次大戦終結にいたる75年間に、国民総生産は約10倍に伸びているが、人口増加の2倍半を考慮に入れると、一人当りの富の増加は4倍に当る筈であった。しかるに実際の国民生活水準はその長い期間に、2倍強にしか達していない。すなわち2倍弱の部分が、国家および資本家の資本蓄積に向けられ、国民の生活水準の犠牲において実現した高度の投資率が、急速に生産力の拡充、経済的フロンティアの拡大を可能ならしめたのである。

後進国における経済発展は、人口・技術・資源、政治・文化・国際的環境、および資本の諸要因の相互依存的関係を土台とすべきことは、改めて論ずるまでもないが、封建的経済関係からの脱却をいそぐために、なにかなく必要としたのは資本蓄積優先政策であった。それには、国民の生活水準の低位性を維持して高率の貯蓄に備え、付加価値労働分配率を低きに保って、低廉豊富な労働力の利用を可能ならしめるような環境を整え、資本需要に対応するに足る上層所得層の投資意欲を誘い出すために、所得分配の不平等に導く高い利子率を取って維持しなければならなかった。斯くてなお不足する資金造成のために、租税政策とインフレ・オーバーローン政策を追い打ちする政府政策は、他方の極に、広汎な低所得階層の沈黙現象を生み出さざるを得なかった。

1909年のクリスマス前夜、神戸新川の貧民窟に移った賀川が、そこで日夜体験したものは、日本社会のこの特殊条件から必然的に生み出される構造的貧困であった。彼は、ロンドンのイースト・エンド極貧街に身を投じたトインビーやバーネットのごとく、高い階層から貧民窟入りをしたのとは事情を異にし、破産（15歳）した家の結核少年として、身みずから極貧そのもののなかから出発したのである。宣教師 H. W. マヤス博士から洗礼（16歳）を受け、そのとき安部磯雄や木下尚江またトルストイの著作に触れる機会を与えられて、早くもキリスト教社会主義者、また非戦論者としてのめざめを体験している。この多情多感な少年時代に、慈愛の人マヤス博士か

ら与えられたのは、「私が17の時に40日抱いて寝て貰い、19の時に肺病で倒れている時にも、漁夫の家の畳の無いところで、二日も一緒に蓆の上で寝て」貰ったその肌の温かさ、それゆえに「私の悲観した時に、私の太陽に向けて、夕日に私の涙を干すことを教えてくれたのもマヤス先生です。」と記し得る賀川は、その貧しさ、その病苦ゆえに、一入深く隣人との愛のめぐり逢いの感激を身に沁みて味ったのである。

ゲーテは、「涙とともにパンを食べた者でなければ、人生の味はわからない」と記しているが、この実存的体験あればこそ、賀川は貧民窟の寒さにふるえればふるえほど、聖書的愛の温かさに励まされ、隣人の苦悩から立ちあがる姿に接すれば接するほど、貧民運動に不撓不屈の勇氣と執念を与えられたのである。当時、士族階級より転身してインテリ・キリスト者となった人々からは、貧民窟の極貧に身を置いて、この絶望的環境のなかで、「ただもう贖罪者イエスの十字架を負わせられて、世界の嘲罵と怒号の中を、沈黙のまま、静かにカルヴァリーまで歩もう。」と思い定めた詩集『涙の二等分』(31歳)の述懐は、到底うまれてこなかったであろう。そこに余人の追従をゆるさない賀川独特の芯の強さがあった。その固有の視点から、『貧民心理の研究』(1915年、27歳)という、私たち社会科学研究に携わる者にとって、特に注目すべき書がうまれた。

#### IV 『貧民心理の研究』を出発点として

明治学院高等部神学予科に入学(17歳)して以来、その図書館で1日1冊主義の読書を重ねた知識に、貧民窟で観察した実地経験を織り込む賀川の『貧民心理の研究』は、今日といえども十分に学界に示唆を与え得るものを持っている。

その論点は、「物質の欠乏した人間の研究」「物質の欠乏の精神に及ぼす影響」「物質の欠乏した人間の精神の研究」の三編をもって扱われている。チャールス・ブースの『ロンドンの生活及び労働』を紹介し、当時としては目新しいスウェッティング・システムや、生計費に関するエンゲル法則などの新概念を紹介し、また貧民窟生活者ならでは知り得ぬ生活実態を詳細に描写している。注目したいのは、貧民発生の原因を、1) 自然的原因、すなわち地理的原因、天災、火災、死と疾病、生物との生存競争など、2) 人為的原因、すなわち政治、教育、宗教、社会、衛生、経済、道德等の諸要因より説明し、単に経済的原因に限定することなく、全人的人間の問題として、多要因の総合的理解の必要を強調していることで

ある。惜しむらくは、その全構想が考現学的実証主義に走り、未だ資本主義体制の構造的貧困の重大性を認識するところが、比較的薄弱である。安部磯雄が、既に明治34年の『社会問題解決法』、36年の『社会問題概論』等で明らかにしたような、剰余価値学説による貧困解釈と、その社会主義的解決方法のごときは、未だ本書の貧民経済理論の基調とはなっていない。スウェッティング・システムにおける労働者低賃金の実態が、実例と統計とをもって示されながら、貧民経済の表面を通り過ぎる印象を与えるのは、批判を免れないところであろう。本書では、社会的貧困状態からの脱却の道を、安部のように資本主義体制そのものの変革に求めず、宗教と教育による貧民の人格向上への期待に終っているのは、社会科学的分析の浅さに起因しているというべきであるかも知れない。

しかし本書の本論的叙述としての貧民心理の分析となると、これだけ豊富な貧民窟の実際記録を素材として書かれた書物は、他に類例をみないといわれている。生命軽視の心理、住居条件からくる人格への悪影響、物質生活の欠乏からくる貧民の知識・感情・意志の退化現象、貧民道德の特徴と犯罪との関係など、貧困を原因とする人間疎外を、貧民窟の隅々にまで追求める経験科学的方法は、彼が単なる精神主義一点張りの説教者ではなく、極貧の友なき者の友となる社会運動家としての、十分な動機と素質とをもっていたことを物語っている。

賀川は、貧民窟の「貧民と日本の下層労働者とをできるだけ区別して論じたい」とこの書物で述べている。しかし貧民窟の救済は、そこに落ち込んでくる労働陣営下層の不熟労働者の労働条件の改善を抜きにしては、永久に寝の河原の石積みになることを、実地経験のなかで、誰よりも鋭い実感をもって見抜いていた。滞米の28歳夏、ニューヨークの貧民窟を視察したとき、労働者の示威運動を目撃して、日本における労働組合結成の急務たることを悟っていた彼である。30歳(大正7年)の四月には、大阪における友愛会創立6周年大会の講演会で、「労働者は何故に貧民となるか」という、彼のその後の活動方向を宣言するかのような、記憶さるべき講演をおこなった。賀川は友愛会荏苒支部長となり、その翌年四月には、鈴木文治、久留弘三らと友愛会関西労働同盟会を結成し、その理事長に選ばれた。友愛会運動との深い繋がりによって、いまや賀川は齢わかくして関西労働運動の先頭に立ち、この年、数回に亘って、大阪中之島公会堂における労働組合公認要求や普通選挙期成、また治安警察法第17条撤廃の演説会で、得意の雄弁を振って

いる。須磨の内田信也邸で、内務大臣床次竹二に労働問題について提言したのもこの年であった。この大正8年は、彼が労働者階級の自主的生活防衛のために、購買組合「共益社」を設立し、彼の生涯のいま一つの大事業たる協同組合運動への火蓋を切った意義深い年でもあった。

素質ある人間というものは、真に生命の躍動する場におかれるとき、その頭脳の回転は、書斎人の緻密・繊細とはまた違った独特の火花となって、評論に詩文に汲めども尽きぬ傑作を噴出させるものとみえる。賀川は、独特の生気発刺たる文章をもって、貧民窟伝道と社会運動の余暇に、次々に炎のように燃え立つ著述を発表し始めた。文体剛放、時として論理独断の誇りを免れないとしても、その真生命は、ただ訴えずんば止まぬ人間解放への大悲願の吐露にあって、学者や文人の批判を蛙に水と聞き流す趣きがあった。私は、賀川の著書を繙く毎に、この大正期の意気天を衝く著述には、インテリ風の批判を加える興味を失う。大正デモクラシーの一方の旗がしらとして、時勢の進展に触発された賀川は、つねに内側から溢れ出る生命の声を、働き人のことばで大衆のなかに注ぎ込む闘士の風格を示し始めた。『精神運動と社会運動』詩集『涙の二等分』『労働者崇拜論』——これら賀川31歳の文章、而して翌年の『主権経済の原理』と同年に始まる小説『死線を越えて』『太陽を射るもの』『壁の声きく時』の三部作のごときは、この短期間に書かれた貧民や労働者との一体感告白の書である。

『涙の二等分』に序文を寄せた一代の歌人と謝野晶子が、賀川を論ずるところに心ひかれる。「同じ社会改造家の中でも、私が堺利彦さんや河上肇さんの言論に、愛着的な一種の離れ難い親しさをもつというのは、二家の言論に詩があるからです。その言論を透して、二家の最も奥深い処にある優しい温かい命に触れることができるからです。……二家の唯物史観的な言論には必ずしも一同意することができないにしても、その感情生活において二家と一致することが出来ると信じて居ます。理論の一致と違って、この一致は本質的なものだからです。この意味から、私は賀川さんが詩人たる一面を示されたことに驚き、且つそれを喜びます。」「私はまた、一面に矯激な突撃性の持主である賀川さんが、一面にまた春の日のやうな平和な感情を豊かに持って居られることを嬉しく思ひます。それが人間に対すると同じく、自然に対してもよく現れて居ます。」「私はこの詩集を拝見して、賀川さんを一層尊敬し、一層信頼します。賀川さんに景福あれ、賀川さんの事業に恩寵あれ。我国の諸種の改造運動が軽躁と粗暴とから免れようとするには、賀川さん

のような指導者と実行者とを一人でも多く得ることが必要であると思います。」いささか長文の引用をしたのは、賀川の人となりの一側面を的確に指摘していると考えられるからである。

## V 大正リベラリズムと賀川の独自性

賀川豊彦の個性形成と社会的実践の背景には、滔々たる大正リベラリズムという時代の潮流があった。第一次大戦による日本経済の拡大は、新中間階級 (intermediate class) の成長を促した。それは、未だヨーロッパの意味での中産階級 (middle class) のような安定した社会的存在ではなく、プチ・ブルジョア性をもって、階層的に浮動し易い弱さを孕んでいた。かれ等は、明治より大正期にかけて、軍国主義、官僚主義の弾圧に抵抗した尾崎行雄、島田三郎等の自由主義的伝統を発展せしめ、中小ブルジョア、インテリ層を社会的基盤として、大ブルジョアとその政党への従属状態を離脱し、天皇主権制の厳存する当時の歴史的状況のもとで、人道主義的立場から、被圧迫階層の解放を求めようとする漸進的改革の運動を展開した。

その指導者たちのうちには、いわゆる大正デモクラシー、すなわち浮田和民の流れを汲んで、憲政論の立場から、政権運用上の原理として、民意尊重の議院内閣制の正統性を主張することによって、天皇親政論に対抗しようとする「民本主義」を主唱した吉野作造（『憲法の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず』中央公論誌、大正5年）、大阪朝日新聞連載の『貧乏物語』（大正5年）をもって、資本主義社会特有の大衆貧困の構造的原因を衝いて、被圧迫階層の経済的解放への道を示唆した河上肇があり、労働者・農民への直接の社会運動を進めた鈴木文治、賀川豊彦、杉山元治郎等があった。また大正リベラリズムの一派として、有島武郎、武者小路実篤、志賀直哉等、人道主義的文芸運動に携わる人々があった。この政治・経済的改革を目的として、特に「大正デモクラシー」の名をもって呼ばれるにいたった思想運動は、新渡戸稲造、大山郁夫、福田徳三、長谷川如是閑、佐々木惣一等、多彩な学者グループに支持され、主として軍閥・官僚主義打破、普通選挙と議会主義の実現、また社会主義と議会主義との結合を主張した。

吉野は、議会主義を説くに当って、「社会主義そのものを包括し、近代政治全過程に亘り、是を一貫する根本の重要原則だと考える方が、妥当の見解である。」と論じているが、その社会主義につながる民本主義は、背景にある社会階級のプチ・ブル的、インテリ的構成と、大

逆事件後の絶対主義天皇制と忠君愛国の国体明徴運動の異常な昂まりとの必然的結果として、天皇主権論と正面衝突する法理上の人民主権説の観念を敬遠し、政治学における政権運用上のデモクラシー提唱という温和な方法を選ばざるを得なかった。当然、それは折から進展しつつあったロシア・マルクス主義のボルシェビズム的展開にみられるような、階級闘争・暴力革命・独裁政治への反対に導かれ、議会主義へのサンジカリズム的不信に掩われる山川均や堺利彦たちの、プロレタリア民主主義的立場からは、ブルジョア民主主義的改良主義という非難・攻撃を受けることとなった。

大正リベラリズム期は、明治期の専制的な武断的権力主義と昭和期を襲う軍部ファッショとのはざ間に、国民大衆の内面に鬱積する生命発現への宿望を、暫し地殻のゆるみを裂いて噴出する火山のように、歴史の表面に燃え上らせた「炎の時」であった。たとえ一部の小市民的インテリ層の叡知を媒介として、世代の背負う因縁に歪められたにもせよ、民主主義運動は、何等かの意味で、人間存在の根源的なものを探求させる世界史的瞬間を孕んでいた。賀川の聖書的人道主義は、大正リベラリズムのもつ民主主義的渴望と接触して、一層振幅の大きい人間讃歌を唱えあげる足場を築かせたのである。

賀川は、確かに大正リベラリズムの闘士であり、「時代の子」であった。『主観経済の原理』（大正9年）、『自由組合論』（大正10年）など初期の著作より、戦後、畢生の大作『宇宙の目的』（昭和33年）にいたるまで、大正リベラリズムの戦友たちより受けた幾多の示唆は、その積極的な人間肯定主義・貧民および労働者・農民解放論、協同組合運動、議会主義、平和論等を貫いて、生涯の思想的栄養分として、息の長い影響力を保ち続けている。

しかし賀川においてユニークなことは、彼が単に時勢の追従者として、ただ歩幅をひろく濶歩したというのではなく、大正リベラリズムに呼応して、「人間復権」のキリスト者的大望から、貧民窟より歩みを起した独自の体験を糧として、工夫に工夫を重ねる幾多の社会的実践の実験を提示したことにある。

その第1の功績は、貧民と労働者・農民に格別の迫力をもって突入したことである。先に述べた『貧民心理の研究』は、その小手調べであったが、『労働者崇拜論』（大正8年、31歳）は、未だ労働者が社会的地位において、いと卑しく軽蔑せらるべきものと思ひ慣らされている時期において、「労働者は尊厳を知る。彼は充分崇拜せらるべき理由をもっている」ことを強調したのである。

ここには、労働の哲学を出発点として、社会変革の理論が28の小論文をもって提唱されている。社会運動家としての賀川の全貌が、はやくもこの一書に凝集されている観がある。

労働において、人は万物を創造し、万有を知り、壮麗な宇宙の営みに参加する。人が生きておれるのは、労働者のおかげである。労働者の生存権と労働権の保証のために、社会改造が必要である。宗教は労働者階級の防衛のために働くべきであるにも拘らず、教会は資本主義と握手しているではないか。日本には、いま3つの虚偽、すなわち軍国主義でなければならぬという嘘、日本の歴史のためなら嘘を書いてもかまわないという嘘、而して、この嘘を支えて行くために、現状維持の資本主義が最後の世界であるかのように考えている安価な文化主義の嘘があるという。本書の資本家の貪欲と資本主義経済組織の罪性告発は、内務省警保局の検閲に触れ、発売禁止となったが、本書に要求する普選、八時間労働制、最低賃金制、男女労働者の同一賃金、工場法改正、労働者住宅の建設など、労働運動その後の進展のなかで、次第に解決に向ったものばかりである。

今日から顧みれば、本書の諸論調は書生気質の壁新聞的記事ともみられようが、賀川は運動の先頭に立って、その実現に骨身を惜しまなかったのである。与謝野晶子をして「矯激な突撃性の持主」と評せしめた賀川が、この社会改造の書を記すに当って、「社会連帯責任」や「愛本位」の項において、階級闘争のほかに社会問題の解決はないとする急進主義を排して、全人類の解放は愛と犠牲と協同の社会連帯をもって向かわざるべからず、世界の労働者は、愛と自由による国際労働組織に団結せよと論じているのは、大正リベラリズムの理想主義の本領たるとともに、賀川のキリスト教的平和主義の譲り難い主張として、終生渝らぬ主張点でもあった。

## VI 人間主体の選択的行為と主観経済学

資本主義経済への挑戦は、新川生活以来の不動の信念であったが、しかも賀川をして社会運動における精神的価値を重視せしめ、人格的社会主義による世界の改造と再生を主張して止まなかったのは、マルクス唯物史観の自然科学的方法が、経済行為の客観的内容を語る点において優れたものをもちながら、経済行為における生命的なもの、すなわち人間主体の意志生活行為としての側面を軽く観ることへの不満を抱いたからである。賀川は、マルクス経済学に対して、象徴的意味をもって「主観経済学」を唱え、特に経済行為における人間の心理、人格

の価値への注意を喚起しようと努めた。

『主観経済の原理』（大正9年、32歳）の原型は、すでにプリンストン大学より帰朝直後の著書『精神運動と社会運動』（大正8年）のなかの「主観経済学の組織」の項に示され、戦後の『人格的社会主義の本質』にも、繰り返して強調されている賀川理論の最も特色を発揮している部分である。彼は、マルクス『資本論』とラスキンの『この最後の者にも』を読み比べ、その統一によって、主観経済学に到達すべきものと考えたのである。

賀川は、もともと単なる観念論者であるどころか、却って鋭い自然科学的関心の持ち主であり、プリンストン大学においても、専攻したのは「哺乳動物の進化論」であった。その入学試験には進化論の梗概を求められて、ダーウィン、ラマルクなど41名の著書の名を挙げて、試験官より特に握手を求められたというエピソードがあるくらいであった。私は、大学の自然科学研究室や島津製作所の岩石蒐集室を訪問する彼に随行したことがあるが、専門的対話を交わすその風貌は、世間の宗教家や社会運動家とは異なる独特の科学者の雰囲気を感じ、汽車のなかで天文学原書を繙く姿に接することも稀れではなかった。彼は、その宗教信仰においても、天地創造の信仰に特別な意義を認め、客観的自然世界の美しさに、詩人的洞察のまなこを向けることを喜びとした人である。

賀川は、マルクスが労働者を尊敬し、労働価値を以て経済学を組織し、人間のための産業組織を創造するために無類の努力を捧げたことを感謝し、無産者の生存権と労働権を享受する権利を獲得せしめようとしたことに、強い共鳴を感じている。しかし唯物史観的経済論が、物質および客観の対象物中心に傾き、資本論第二巻の資本流通論がヘーゲル弁証法の方法に従って解説する「貨幣→物質→貨幣」の方程式が、心理的係数をも読み込むことを軽視しているのは誤りであるとする。しかし賀川が、労働価値における労働者主体の意志活動の人間価値的側面に、人々の関心を惹こうと努力するのあまり、マルクスが物質的生産方法における上記構造の心理的要素を考慮している点をも、素朴唯物論的に解釈する歪みを示しているのは、行き過ぎというものである。曰く「唯物史観公式の物質的生産方法は、階級意識から階級経済までの凡てを入れるのである。」「然しこれをしも唯物運動・必然的運動というならば、マルクス派の唯物史観とは異名同質のものであって、ただマルクス派の唯物論は、パンが考え、パンが意志するものであって、マルクス派の物質というものは、私が心と称するものだ。」

ここに「パンが考え、パンが意志する」と解するのは、

初期フランス唯物論ならいざ知らず、唯物史観の意図するところではない。マルクス理論における社会関係とは、物質的關係とイデオロギー關係の総体であり、上部構造の下部構造への反作用をも十分に考慮した上での唯物論であって、賀川のこの風刺的表現は誤解を招かせずには措かぬ。

賀川が、唯物史観に対して敢えて「唯心史観」といういささか挑戦的な表現をもって、注意を喚起しようとしたのは、実は物体・身体・事物・自然など、物的契機存在を否定することでない。唯物史観を、物質的要素の一方的尊重によって、経済史観的に解釈するセリグマン的理解の横行する当時の思想界において、賀川の主張しようとしたのは、経済学は単なる物の歴史ではなく、人間生命の歴史であるということであった。すなわち経済行為に正・反・合の弁証法を導入するに当って、物的契機の支配する必然論に過大の任務を負わせることによって、人間行動の主体的契機を不当に軽視することに、異議を挿もうとしているのである。

賀川の生涯の思想体系を集約した晩年の『宇宙の目的』に、一層組織的に叙述されているように、賀川が人間生活の特質とみるところは、生命本位の選択にあり、人間の主体としての統一的人格は、生命の社会的発展のために、客観的実在世界を自我に選択・摂取する自由を有する。労働とは、この選択の自由において、物的世界を社会的生命本位に役立つものとし、社会的実在へと造り変えてゆく創造的行為である。

選択の自由とは、単なる「偶然」の無限連続のなかの無作為抽出ではなく、生命進化の宇宙目的によって整然と規制されている自然および人間界の法則性を、森羅万象、一見混沌たるものに受け取られるなかに、的確に選び取って行く叡知の自由である。自然界に先験的選択律が働いているように、人間社会にも、生命発展の不動の理法として、正義と愛の法則が厳然と支配している。賀川が『愛の科学』（大正13年）に既に記そうとしたのは、いわば社会物理学ともいうべき確率をもつ愛の社会連帯法則に従う自由であった。

人間はかかる自由の主体であり、これあるが故に労働運動も、新社会建設も、新芸術も起り得るのであって、その宇宙目的に沿う法則に従う自由に目覚めることのできないとき、人間は、運命・輪廻・無明地獄のなかをさまよう。いまや「蓋然律」(probability)の数学が、却って統計的確率性を計算する確率論の展開を遂げている事実注目しようとしているのである。



## VII 宇宙悪の根源と贖罪愛

然らば、人間社会の貧困、苦難、罪惡など、何故にこれらの「宇宙の目的」に反する宇宙悪が、地上に存在するのか。それは、19歳の時から問い始めた賀川の終生の宿題であった。

『宇宙の目的』(昭和33年、70歳)は、賀川の生涯を賭けた傑作である。私は、明治学院大学で、『賀川豊彦とその時代』と題する12回の連続講演を行ったとき、その科学理論解明はいかに難解とはいえ、賀川 of 思想理解には不可欠の書と判断して、本書の再版普及を念願し、岩波書店と交渉したのであるが、応諾を得ることはできなかった。著述の平易明快を誇る賀川が、岩波書店に受け容れられないほど、難解で普及の困難な著述を遺したことは、皮肉といえば皮肉である。

ソ連同盟科学アカデミー哲学研究所員ゲ・エフ・アレクサンドロフは、「適応性は目的論に役立つ理論を確証するものではない。目的論は科学の敵である。」という。経験的事実の確定に厳密に限定される科学的思惟のなかでは、その批判は正しいであろう。賀川が語ろうとするのは、その限界付けられた科学的思惟方法では達観されない宇宙と生命機構の定向性ある選択作用であり、宗教者としての「摂理」構造の直観に導かれたものの固有の判断から、この宇宙哲学の書をもって、人間生活行為の選択作用の在り方のなかに、宇宙悪の根源の存することを明らかにしようとしたのである。

世界の科学法則究明の努力のあと、全体を通観して、賀川はそこに、宇宙と生命機構のなかに維持と発展のために働らく合目的性を、揺ぎなきものとして認める。偶然と認められるひとそよぎの風も、摂理のもとにある「場」のなかの必然として起る。生命力の変化・生成に当たって行われる選択は、一定の法則に従って、結局高度の合目的性にたつた。この力・化・成・選・法の諸要素が、賀川哲学の中心カテゴリーであり、科学の場におけるその例証こそ、若き日からの彼の科学への関心と努力との根幹を為すものであった。

生命力の変化・生成・選択・法則の諸範疇のなかに、特に分化・総合の高次元の選択の自由の存するところでは、合目的性的に的確に合致し得ない幾多の機会が付き纏う。それは、単に自然および人間社会についての、宇宙法則への科学的無智に因るのみではない。聖書はこう説いている。「わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして肢体に存在

する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。」(ローマ人への手紙、7:22~23)法則への無智、たとえまた法則を明確に把握し得たときも、人間生涯に終始つきまとうこの「肉の念い」、すなわち使徒パウロが、「わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである。」と告白し、「この死のからだより救わんものは誰ぞ」と絶叫したものが、生成発展への「変転のずれ」として、宇宙悪をつくり出すのである。この「ずれ」を修繕する修理再生の原理が、賀川に特徴的な宗教的表現をもって、「贖罪愛」と名付けさせているものである。「肉の念い」を十字架にかけるとき、宗教的新生の体験は、原罪性において見失われた聖書的愛を再び私たちの眼前にあらわにするのである。

この罪観と贖罪愛との交錯する宗教的実存の外側で空転する社会変革は、たとえいかに社会主義的社会秩序の実現をみるとしても、そこでは形を変えた「肉の念い」が、止めどなく再現し続けてゆくに過ぎぬ。『基督教社会主義論』(昭和2年)に、賀川は生命・人格価値と労働価値とを統一する労働組合と協合組合の運動を、愛と正義を基礎とするキリスト教的社会主义社会実現の先駆的運動として、高く評価したが、それと同時に、彼は贖罪愛の真義を普遍的に告知する兄弟愛伝道の重要性を強調せざるを得なかった。大正15年11月に始まる「神の国運動」、また昭和2年8月、軽井沢で開催された百万人救霊運動協議会は、この広汎な社会運動に、兄弟愛精神を浸透せしめなければならぬとする特別の切迫感に触発される活動でもあった。

## VIII 非暴力運動としての労働組合論

『自由組合論』(大正10年、33歳)は、賀川の労働組合論であり、川崎・三菱争議の始まる前月(6)出版された160頁の小冊子ではあるが、この吾国未曾有の大争議を指導した賀川の当時の労働運動に対する見解をよく示している。

社会改造において、新社会の構成単位として労働組合を挙げたのは、賀川が早くからラスキンとギルド社会主義に親しんでいたからである。資本主義社会の権力・暴力・強制を排して、労働者が職場において、各人の自由な意思表示のなかから実現する合意的社会組織が労働組合であり、それ故に敢えて「自由組合」の名称をもって、労働者組織の向うべきところを示そうとしたのである。「我等は先づ世界的の大労働組合をつくることだ。そして労働組合が成長するとともに、凡ての社会変革をして行こう。労働者によって資本が出来たものであるから、



労働組合の前には資本は枯死する筈である。私は成長の法則は、ただ労働組合にのみ働くと思っている。」

彼は、大正デモクラシーが、政治的民主主義と普通選挙（大正14年実施）をもって事足りりとする事の誤りを指摘して、労働組合主義を以て健全な社会主義への必須の進路と考えた。ギルド社会主義にいう労働者議会の出発点として、「労働者の産業管理権」を確保する資質をもつ労働組合の育成こそ、社会主義運動の前提条件であり、真の民主主義とは、産業の場において、民衆が勤労の悦びを十分享受し得る自主独立の立場を実現せずしては、確保されないというのである。

労働組合活動は、人道化された工場で愉快地働ける環境づくりを当面の任務とし、家族の生活費・教育・享楽（レジャー）の保証、工場デモクラシーによる発言の自由、労働者利潤分配制、さらに工場の組合管理に進むべきであるとする。この構想は、今日の西独労働組合の経営参加よりもさらに前進した労働環境を提案するものであった。賀川は、当時排撃されていたクローズド・ショップの妥当性を説き、英国の例に従い失業保険の実施（日本で実現したのは、それから25年後の昭和22年のことであった）を提唱している。労働者が失業の苦難を避け得るために、産業管理権の重要なことを主張したが、勿論これは賀川が危険人物視される直接の原因となった。

自由組合論は、大正デモクラシーの潮流に棹さして、自由意志をもつ人間の「成長からくる革命」をめざす基本理念から、暴力革命を否定して、議会主義擁護を標榜するものであった。従ってアナルコ・サンジカリズムの立場からの経済的直接行動（ゼネラル・ストライキ）による革命推進等とは、明確に立場を異にした。造船所大争議の先頭に立つときも、賀川は争議のもつ労働組合の教育効果を重視し、サンジカリズムの大衆から遊離した少数者の英雄主義を、反動政策を誘発する愚かしい空想主義として、抑制すべきものと考えていた。「経済革命において、暴力を用いて労働階級を解放し得る部分がありとすれば、経済制度の政治的側面であって、経済制度そのものは、決して暴力によって解放し得るものではない。つまり暴力は経済革命の本質にふれるものではない。」と述べている。

第一次大戦後の反動恐慌は、サンジカリズム的階級闘争、暴力革命論を急激に伸展せしめ、大正9年秋の友愛会第8周年大会は、関東派を代表する荒畑寒村を中心に、議会主義否定、革命的ゼネストの主張が優勢を占めようとした。このとき、関西側を代表する賀川は、急激急進の不賢明なるを力説し、「レーニンですら云った。『そろ

そろゆっくりと、しかし堅実に労働組合を！』と。ほんとにそうだ、われわれはあくまでも労働組合主義の上に立って、そろそろゆっくりと、しかし堅実に大地を踏みしめて歩くことを忘れてはならないと信ずる。」と同志を戒めている。

大正10年7月、賀川は『労働者新聞』に「兵を養い、時を待て」の一文を記して取調べを受けたが、7月29日の賀川を先頭とする川崎争議団1万3千と警察との衝突の結果として、賀川以下201名の幹部は検束せられ、賀川は神戸監獄に収監され、争議は労組側の大敗北に終わった。しかし『星より星への通路』（大正11年）にこの示威運動の光景を記して、「1万人の生産者が解放の日のために駆け出したその光景は、なんとも言えぬ厳粛なものであった。」と述べ、「私は良き日に生れた」と、争議大敗北のなかにあっても、労働者解放の近きを期待したのであった。

社会的に虐げられている人々の魂を扶えるヒューマンズムと、その爽かな弁舌とは、労働者大衆を動かすものをもっていたにも拘らず、労働運動の指導者としての賀川は、成功したとはいえない。労働経済学者の立場からの隅谷三喜男教授の『賀川豊彦』における賀川評は、まことに適切である。「貧民問題の場合とは違って、労働問題の研究者としては、かれはどう見ても第一人者ではありえなかった。かれに課せられた使命は、労働問題を分析することではなく、労働運動の理念を、新しいヴィジョンを展開することであった。」と。労働力と労働者とを混同し、労働者は商品でないということから、労働力も商品ではないと短絡的に割り切ったって、商品として取り扱われている資本主義経済の重要な現実態を見誤ったり、労働者の賃金は最低線に釘付けられるという「賃金鉄則」に素朴に賛成してしまう賀川を評して、隅谷氏が「経済学者でないかれの限界というべきであろう。」と述べていられることに、私も賛成である。しかし、この誤りあるにもかかわらず、私は住友工場に随行したとき、労働者の求めに応じて、「一枚の最後に残ったこのころも友のためには尚脱がんとぞ念ふ」と筆を振われた横顔を凝視めながら、彼には独特の、無衣無縫、一身の凡てを捧げて止まめ捨身の実践があることを肝に銘じて、えもいわれぬ爽快さを感じさせられたのであった。

労働運動の行者としての賀川が、罷業は認めても、暴力を排する無抵抗主義を重んずる立場から、合法的で秩序正しい争議を力説して、1,300名の解雇と100名の入獄者をうむ大敗北に導いた三菱・川崎争議の悲惨な結末は、「賀川豊彦、久留弘三らの右翼的傾向は、彼らを退

陣に追い込んだ」(糸屋・稲岡著『日本の騒乱百年』(下))といわれているように、「右翼」扱いされる破目に追い込むこととなった。賀川は『星より星への通路』のなかで「私のように成長と人類愛と無抵抗とを説くものは飽かれることもあるでしょう。……私は急ぐことは出来ませぬ。それで私は一人であってもこの真理のために戦うのです。……兎に角、いま私は労働組合運動に於ては、ひとりぼっちの道を歩いて居ます。」それは、確かに敗北者の詠嘆の奥底に、手ごわいもののひそむことを思わせる言葉である。

賀川の権力構造についての分析の不十分さ、日本資本主義における資本の運動法則の厳しさへの認識の甘さ、そこに呻吟する勤労大衆の苦悩への切迫感の足りなさ——というような、種々の角度からの批判が可能であろう。賀川は労働運動に幻滅を感じ、また労働運動は賀川を超えて進み始めたのである。

しかし今日の状況のなかで、世界の社会運動は、その経済的規模の大なる国であればある程、少数者の自己満足的な急進主義では、実効のある階級闘争は遂行し難く、有効な階級闘争にはその基盤づくりをするより広汎な社会闘争の道備えが不可欠の要件であることを悟るに至っている。「兵を養い、時を待て」という賀川の提言は、社会改造のために先ず社会各階層の幅のひろい協力を必要としている事情のもとでは、一段と含蓄あるものとなっているのではないだろうか。

## XI 協同組合運動と世界平和

労働者への親近感に変わりはないが、労働運動の主流から遠去けられつつある賀川にとって、協同組合運動は渾身の努力を傾ける終生の活舞台となった。『自由組合論』公刊の2年前、即ち大正8年大阪に購買組合共益社、大正9年神戸購買組合、大正10年灘購買組合、大正15年安部磯雄、末弘鐵太郎らと東京学生消費組合、昭和2年江東消費組合を設立し、今日の生活協同組合の前身たる戦前の消費組合運動の先頭に立っただけではなく、大正14年には大阪に農村消費協同組合協会を設立し、晩年にいたるまで、全国の産業組合、その後の農業協同組合の思想的推進と、戦後の農協運動における年来の主張たる農協共済の確立のための全国行脚に、精髄を籠めての活動の日々を送った。大正13年、欧州諸国の協同組合運動を視察し、兄弟愛による社会連帯には、協同組合運動は、彼の理想社会のイメージ実現に欠くべからざる実践形態と考えるようになったのである。

大正10年、生涯の交友杉山元治郎と日本農民組合を

結成したが、賀川の農村問題への関心から生れた農村福音学校運動への献身は、デンマークのグルントウィヒの面影を彷彿せしめるものがあった。協同組合運動との提携による新機軸を狙う『農村社会事業』(昭和8年)は、未来を先取りする賀川イズムの一典型であり、農村のための彼の創意工夫は、『立体農業の研究』(昭和8年)にまで及んでいる。彼の指導のもとで、庶民運動としての協同組合は、昭和6年の新渡戸稲造らとの協力による東京医療利用組合(今日の組合中野病院)の設立や、或いは昭和3年中ノ郷質庫信用組合、また江東消費組合の栄養食配給のような新構想の事業を展開し、賀川はまさに福祉事業界の発明王たるの感を抱かしめた。

協同組合運動への洞察を示す十幾冊の著述のなかで、『産業組合の本質とその進路』(昭和15年)の如きは、賀川の世界観・経済観の核心を、協同組合運動の土台に据える傑作であるが、その賀川の協同組合指導者としての特質は、『兄弟愛と経済改造』(昭和11年、『雲の柱』誌3~6月号)に示されている兄弟愛の互助運動を、終始その精神的基礎として強調したことであって、キリスト教信仰とは無縁な農村の組合でも、彼のヒューマニズム的热情は、転落してゆく農村に希望の灯を掲げるものと受け取られたのであった。

日本の協同組合運動史は、賀川の名を永久に忘れ去ることはないであろう。運動における協同体的結合の意義を、彼ほど熱烈に訴えた人物は無いからである。私も彼の足跡を追うともがらの一人として、18年間、大学生協連の会長、30年間、灘神戸生協の理事をつとめ、その灘生協は、いま41万の組合員をもつ世界有数の大生協となったけれども、日本社会の現実構造は、賀川が『組合国家を論じ国家改造に及ぶ』(昭和9年)に論ずるような、協同組合運動にそれほど容易に栄光の未来を約束のできるなだらかなロマンティシズムの沃土ではないことを、私は誤またず直視しているつもりである。たしかに彼は、行動主義とも見える精進一路の体験のなかで、協同組合運動から直線的に、民主国家の誕生を期待し得るかのようなオプティミズムに陥る社会運動家の自己満足的甘さを持たなかったとは云えない。政治運動および労働運動と固く結ばれてこそ、市民運動としての協同組合には、社会改造原理としての真の強身が発揮されるのである。

社会党顧問の地位に就きつつ、政治家の打算に馴染まず、また労働運動に多くの戦友をもちながら、その急進主義から袂をわかし、その厳しい潔癖主義のゆえに、賀川はただ協同組合運動の上に、平和と民主主義の担い手

としての過重の負担を負わしめるような誤謬を避けることができなかった。賀川は『産業組合の本質とその進路』に、協同組合の五大使命として、(1)剰余価値の克服、(2)資本の個人集積排除、(3)資本の社会的集中消滅、(4)恐慌解消、(5)階級闘争解消を挙げている。協同組合運動は確かに資本主義社会のなかにうまれた鬼子として、資本主義と戦う革新陣営の一環であることは否むべきもないが、これら五大使命の代表戦士とみるのは、いかにしても非現実的であるといわなければならぬ。真相を厳格に見抜く用意なくしては、社会運動は自己陶醉を免れることはできない。終戦後、彼は日本生活協同組合連合会の会長として活躍することとなったけれども、その現実の進路は、決して彼の標榜する「組合国家」への道を歩むものと楽観することはできない。

彼の生涯で、その真髓をもっとも強く発揮したのは、平和運動であった。18歳のとき、既に『徳島毎日新聞』に「世界平和論」を連載した彼は、昭和3年、全国非戦同盟を組織し、その伝道講演にはつねに平和を論ぜざるこ

となく、戦時中の憲兵隊拘引も反戦運動に係わっていた。戦後いち早く「国際平和協会」を組織し、雑誌『世界国家』を発刊、昭和29年には世界連邦世界運動副会長に就任するなど、彼のキリスト教信仰は、徹底的な平和論と表裏一体を為すものであった。昭和33年、バートランド・ラッセルと共に原告となり、核実験は憲法違反なりとして、ワシントン裁判所に米国政府責任者を提訴したのも、いまは懐かしい思い出となった。ノーベル平和賞候補に推薦されながら、その実現を待たず逝去の日を急いだことを、惜しまないではいられない。

その思想、その実践の功罪は、多様な角度から吟味されなければならないであろう。しかし長短織りまじる人生の総決算において、賀川のごとくに多彩で振幅の大きい人物は、この世に極めて稀れである。一人の人間が、神と人道の前に決断するとき、斯くも充実した生活の軌跡を遺し得るとは、ただただ驚きであるというほかはない。賀川を批判する私たち自身は、果して幾ばくのことを為し得たというのであろうか。